

伊藤正子著 『戦争記憶の政治学 韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道』

平凡社, 2013 年

1. 三八六世代による「トランスナショナル連帯」 として読む

ベトナム地域研究者である著者が韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題に取り組むようになったきっかけは、映画「シルミド」(2003 年)であったという。1968 年 1 月に起きた北朝鮮ゲリラによる青瓦台襲撃未遂事件で、生け捕られた金新朝がテレビカメラに向かい「私は朴正熙の首を取りにやってきた」と言い放ったことに激怒した朴正熙大統領が、逆に「金日成の首を取る」として組織させた北派工作員部隊の実話を描いた作品である。仁川沖の実尾島で秘密裏に訓練を受けたが、出動命令が出ず、待遇も悪化したことに不満を抱いた隊員たちは決起し、警察・軍との銃撃戦の末に「共産ゲリラ」として闇に葬られる。映画化は政府による真相究明を促し、国防部がついに隊員たちの死亡を認定したことで、ようやく汚名がすすがれることになった。「国家が名もない国民を利用し切り捨てる」という歴史の暗部をえぐった映画が国を動かし、歴史を覆す。そんな作品を韓国人が作ったことに感銘を受けた著者は「韓流オバサン」となり、ベトナムと韓国を架橋するテーマに着手する。

本書が扱う韓国軍のベトナム民間人虐殺もまた、ベトナム派兵を「自由の十字軍」による「正義の戦争」と意味づける公定記憶からは隠蔽・忘却すべき記憶だった。この出来事は、80 年代以降の韓国民主化闘争の中で「発見」された。真相の掘り起こしに中心的な役割をはたしたのは 66 年生まれの具秀姪という女性。そして具が現地で集めた証言を『ハンギョレ 21』に連載し、2000 年以降、ベトナムへの謝罪運動である「ベトナムキャン

ペーン」を展開したのは 67 年生まれの高曝兌記者である。また具がこの問題に取り組むきっかけは NGO「ナワウリ」メンバーによる現地調査に同行したことだが、このときナワウリの共同代表をつとめ、後に『戦争の記憶 記憶の戦争——韓国人のベトナム戦争』を著わした金賢娥も 67 年生まれである。三者に共通するのは 80 年代民主化闘争を経験した、いわゆる三八六世代という点である。

93 年に文民政権が出帆して以降、主に文化芸術分野で頭角を表わしはじめた三八六世代の躍進は、続く金大中から盧武鉉にかけての進歩的政権のもとで、本格的に開花する。映画制作に限って言えば、韓流の嚆矢となった「シュリ」(99 年)、「ブラザーフッド」(04 年)の姜帝圭 (62 年生まれ) や、「JSA」(2000 年)の朴贊郁 (63 年生まれ)、「殺人の追憶」(03 年)、「ゲエムル」(06 年)の奉俊昊 (69 年生まれ) は、いずれもこの世代に属している。「シルミド」の康祐碩監督 (60 年生まれ) も同世代である。この映画を鑑賞した著者が、現代日本にも遍在する「国家が名もない国民を利用し切り捨てる」というテーマを見出し、韓国軍によるベトナム民間人虐殺事件に関する研究を始めたことや、具秀姪など三八六世代を媒介として「残余の記憶」の行方を考究していく手順は、とても直感的でありながら、結果としてきわめて正鵠を射た韓国社会への洞察となりえている。本書は優れた研究者の力業というよりほかない。

ベトナム地域研究者を自任する著者であるが、地域研究者が歴史的動態という観点からあるテーマを取り上げるとき、それは(評者も含めて)ほぼ自明的に一国史という枠で考究されてきたよう

に思う。この研究が斬新で刺激的なのは、ベトナム地域研究者による韓国語を駆使した韓国研究にも仕上がっているという点だけでなく、ベトナム戦争という韓国とベトナムに共有された出来事の「記憶」をめぐる、その意味づけがトランスナショナルに相互作用するプロセスが動態的に描出された点にある。たとえば韓国民主化闘争に関心を寄せる評者の立場からは、サイドストーリーでしかなかったベトナムとの結びつきに焦点をあてることで、これを韓国現代史という一国史の枠から引きずり出したことに本研究の功績を認めたい。

これと似た試みとして、70～80年代の韓国民主化運動史を「T・K生」を結節点とした日韓連帯運動の再帰性という観点から捉えようとする李美淑の研究（李美淑 2015）が、著者とほぼ同時期より手がけられている。岩波書店の『世界』を中心とした日韓連帯の担い手たちの多くは、植民地主義に対する歴史認識に動機づけられ、和解のしるしとして韓国民主化運動に連帯した。こうした視点は一国史を超えて、「トランスナショナル連帯」を通じたより動態的で再帰的な運動史の再記述に挑むもので、これまでにない切り口となる。

評者は本書を、日韓連帯運動がもたらした「1987年体制」後の韓国から、ベトナムへとほたらきかけられた「トランスナショナル連帯」とのひとつの過程として読んだ。

2. 本書の概要

本書は四つの章、および韓国軍のベトナム派兵にかかわる先行研究をレビューした附章よりなる。

第一章「韓国における記憶の語り方」では、先述した具秀姪と『ハンギョレ 21』による「ベトナムキャンペーン」、これに先行する NGO「ナワウリ」による現地調査を通じて、韓国軍によるベトナム民間人虐殺が「発見」される過程と、続いて、これが「自国の加害の歴史」「ベトナムでの恥ずべき歴史」として韓国社会に投げ返され、記憶が再解釈される過程が論じられる。そうした中、ベトナム戦争を「正義の戦争」として記憶し、虐殺を「武勇伝」として語ってきた参戦軍人たちとの間で「記憶の闘争」が惹起される一方、「自分たちがベトナムで行ってきたことを真摯に反省し、

誠実に謝罪し、未来の平和のために生かそうと考える元兵士たち」も名乗りをあげる。このように「民主化後の韓国では、現在の保守政権下でもなお、記憶同士が『闘争』できる余地がある」（74 ページ）。それに対し、次章では「記憶の『闘争』の余地がない」ベトナムにおける記憶の語り方が対比的に考察される。

第二章「ベトナムにおける記憶の語り方」では、ドイモイ後のベトナムが「過去にフタをして未来へ向かおう」という方針のもと、戦争の記憶の語り方を管理・統制している様相を地域の独自性と時代の推移によって考察する。ハンギョレ新聞社と共同で「韓国軍民間人虐殺助け合い」キャンペーンを提案した現地紙の試みは、韓国との外交的・経済的利害関係に悪影響の及ぶことを懸念した政府によって妨害された。また通信社による世界への配信もベトナム外交部の圧力で阻止された。それでも 2000 年代前半までは『ハンギョレ 21』やナワウリの活動に感銘を受け、賛同を表明するベトナム人が増加した。またグエン・ジー・ニエン外相（当時）は具秀姪に親書を送り、「道義的には歴史にもとづいた真実の報道や、謝罪のための虐殺犠牲者を援助する活動を賞賛すべきだとの認識」を示した（82-83 ページ）。だがその後の 10 年間で、そうした道義的な認識は後景に退き、「外交・経済関係を優先する意図」が前景化ようになる。本章で紹介される記憶の語りの事例では、それが「地元でのみ」の語りとして外交問題に結びつくものでない限り、政府による規制は一切ないという。しかし 2000 年代後半に韓国で保守政権が登場すると、「あくまで真実を追求しようと動く韓国人の存在は、(略)、国家関係重視のベトナム政府にとってはかえって『目障り』となっていくた」（160 ページ）。その影響は著者自身にも及び、2011 年以降、現地調査に対する干渉と締め付けが厳しくなっているという。

第三章「交錯する記憶——報道 10 年後の軋轢」が明らかにするのは、2001 年にベトナムを訪問した金大中大統領の「謝罪」に反発を強めた参戦兵士たちが巻き返しに転じて、各地に「ベトナム参戦碑」を建立し、圧力団体として影響力を行使する過程である。李明博政権下の 2009 年、国会

で審議された功労者の顕彰制度をめぐる法律の条文で、参戦兵士を「世界平和の維持に貢献した」と表現した文言にベトナム政府が噛みつく一件があった。ベトナム戦争に勝利したことが現政権の正統性の根拠であり、また国家中枢にいる人々自身がベトナム戦争を戦ってきたがゆえに、その意味を貶価することはその「誇り」「正統性」「アイデンティティ」に抵触する問題であったからだ(190 ページ)。この悶着は国内には知らされないまま、韓国との外交・経済的関係を優先したいベトナム政府は法律の文言から「ベトナム戦争」を削らせることで目をつぶり、一方の参戦兵士たちも 2011 年施行の「国家有功者等礼遇及び支援に関する法律」によって法律上の受け皿を得た。他方、虐殺の真相を究明し、ベトナムに謝罪し、和解への道を模索しようとする具秀姪やハンギョレ新聞社、ナワウリの活動は、ベトナムと韓国の双方から阻害されることになった。ベトナム戦争の意味をめぐる両国政府の公定記憶は真向から対立するが、互いが互いの事情を「慮る」配慮を示したことで、どちらの公定記憶からも取りこぼされた「残余の記憶」はそのまま葬り去られる。しかし戦争責任から目をそらすことなく、「苦痛の連帯」をめざそうとする民間の動きは今も粘り強く続けられているという。

第四章「記憶の戦争——和解への道とは」では、まずベトナムがなぜ「過去にフタをする」のかを説く。北ベトナムからみた「戦争の記憶」は脱植民地化・民族解放の「建国神話」と意義づけられ、「公定記憶」として政権の正統性の源泉となっている。統一ベトナム国家は旧南ベトナム政権側だった人々や、戦後の急速な社会主義化の中でさまざまな圧迫や理不尽を受けてきた人々の不満を封じ、経済発展によって国民を統合しようとした。虐殺の横行した中・南部地方で過去を掘り起こせば、それは政府や当事国への不満として跳ね返り、外交関係を悪化させ、経済援助に悪影響をもたらすと考えられた。掬い取られなかった残酷な記憶に共苦共感する具秀姪やナワウリの活動は、被害者たちにとっては「癒し」となったが、国家によって「過去にフタ」をされたのである。それでもなお韓国で、「ナショナル・ヒストリー」に取り込ま

れなかった『残余の記憶』の中にこそ存在した真実」を掘り起こし、「負の遺産」を引き受ける動きが地道に続けられているのは、「過去にフタをする」日本と何が異なっているからなのか。著者は日本の戦争の記憶を論じる中で、「許しは、分析と語りかけと生き方の中にしかない」という野田正彰の言を引きながら、集団でなく自我を突き詰めた「応答可能性」の所在を問う。そして具秀姪たちの取り組みはその責任がはたされた結果であり、世代と国境を超えた「応答可能性」としての戦後責任へと道を拓くもの、戦争責任と植民地責任を負う日本が学ぶべきものとして評価する。

3. 若干のコメント

著者いわく、「本書の内容は、韓国社会の分析などへのつつこみが足りず、韓国人や韓国研究の専門家にとっては物足りないところが多々あるに違いなく、批判は甘んじて受ける」(263 ページ)というが、本書に物足りない点があるとすれば、むしろ批判は韓国研究者自身が甘んじて引き受けるべきだろう。何より本書は一国史としての韓国現代史に風穴を開けてくれたのだから、これを批判的に発展させて新たな韓国現代史を再構成することが、本書に対する私たちの「応答可能性」ではないだろうか。

以下に、いくつか気づいた点をあげて結びとする。

第一に、記憶の連続性という視点である。ベトナム戦争は南ベトナムをアメリカ傀儡政権から解放するためのイデオロギーの戦争であり、民間人虐殺は活発なゲリラ活動で自軍を脅かすベトコンへの憎悪から無差別に繰り広げられた。これは参戦兵士にとって単発的な出来事ではなく、同様の性格をもつ 4・3 事件および朝鮮戦争との連続性の中で、戦時トラウマという個の次元から、急速な近代化に付帯した共産主義の悪魔化という国家の次元に至るまで、幅広く捉えるべき課題である。

一方、記憶の連続性は、謝罪運動を中心的に担った三八六世代においても考慮すべき課題となる。光州事件が民主化闘争の原点とされるのは、それが分断の記憶を掘り起こし、運動へと再帰されてきたからだ。そうした中でベトナムに関心が寄せ

られ、『白い服——サイゴンの女子学生の物語』がひそかに読まれたのは、分断と統一の記憶がそこに先取りされていたからにはかなるまい。またベトナム戦争を描いた作家たちのうち、運動圏がことにヴァン・レーに惹かれた事情もその記憶の連続性と関係している。詩人としてデビューしたヴァン・レーの筆名は、詩人になる夢をはたせず戦死した友人の名に由来するという。それは同時に生還できなかった無数の戦友たちの集合的な名でもある。ヴァン・レーは問う。「私はどうして生き残ったのか、あなたはどのように生きているか」と（パン 2010: 121）。紙幅の都合上ここでは詳述できないが、これは三八六世代が光州事件とこれに続く民主化闘争で犠牲となった者たちを記憶し、運動のエネルギーとして再帰させるやり方そのものなのである（真鍋 1997、2010 参照）。

両者の「記憶の抗争」は「6月抗争」対「顕忠日（6月6日）」という表象を介して、光州望月洞墓地が聖域化された94年、国立5・18民主墓地に昇格された97年を機に、すでに水面下で始まっていた。つまり「記憶の抗争」それ自体を、記念日に表象された記憶の連続性の中で捉える必要があるのである。

第二に、加害認識と贖罪行動に含意されたナショナリズムという限界について。この点は金榮鎬の論稿（2005）で緻密に解析されており、ここでは詳述しないが、先に述べた記憶の連続性の視点から付言したい。三八六世代は民主化後、映画制作などの文化芸術活動はもとより、ベトナムへの謝罪運動、ナワウリや参与連帯などの市民運動だけでなく、「慰安婦」問題解決運動の担い手としても浮上した。90年代初めに女性運動研究の立場から挺対協にコミットしていた山下英愛は、運動体内部の家父長的性格とともに、活動家と被害女性たちの間の共感の土台が「民族」に止まっていた点を批判的に述べている（山下 2008: 165）。民主化闘争が光州事件に見出したのは「民族」だった。民主化を実現させた「6月抗争」を象徴する有名な写真も、大きく掲げられた太極旗をバックに疾駆する学生運動圏をとらえたものだ。本書で惜しむべき点があるとすれば、先行する金榮鎬の論稿で示された「苦痛の連帯のナショナリズム」

（金榮鎬 2005: 23）という指摘が（金を参照しながら）看過され、「苦痛の連帯」に言及したところで記述が閉じられてしまったことだ。

「ベトナムでの恥ずべき歴史」という場合、そこには回復されるべき「民族」の道徳性という含意がある。イデオログたちにとって民主化とは「よき国家（南北朝鮮の共存による統一）と、よき政府（軍の政治介入反対と民主化）」へと向かうことであり、「国民の連帯や民族の尊厳の回復として」構想された（金 2005: 23）。これは韓国民主化闘争を内側から強硬化した一方で、民主化という普遍的価値の及ぶ範囲が「民族」に回収されてしまうことを意味した。本書では、元「慰安婦」女性たちがベトナムの被害者たちに共苦して、自身が政府から受けた多額の補償金をそっくり寄付するくだりが述べられている。それは「民族」を超えた「苦痛の連帯」、そのような「トランスナショナル連帯」として、加害責任に対する普遍的な「応答可能性」のあり方を予兆させるエピソードではないだろうか。

しかし何よりも、幾多もの政治的困難の中で行われた本研究に対して、ベトナムと同じく分断とイデオロギー戦争の時代を経験した（している）地域の専門家の一人として、評者は深い共感とともに最大級の敬意を表したい。

（真鍋祐子 東京大学東洋文化研究所）

〈引用文献〉

- 李美淑 2015. 「トランスナショナルな公共圏とメディアの可能性に関する考察——1970年代～80年代における『日韓連帯運動』を事例に」東京大学大学院情報学環・博士学位論文。
- 金榮鎬 2005. 「韓国のベトナム戦争の『記憶』——加害の忘却・想起の変容とナショナリズム」『広島国際研究』第11巻。
- 真鍋祐子 1997. 『烈士の誕生——韓国民衆運動における「恨」の力学』平河出版社。
- 真鍋祐子 2010. 『増補 光州事件で読む現代韓国』平凡社。
- 山下英愛 2008. 『ナショナリズムの狭間から——「慰安婦」問題へのもう一つの視座』明石書店。
- バン・ヒョンソク 2010. 「ベトナム戦争とヴァン・レーを読む韓国の視点」今井昭夫・岩崎稔編『記憶の地層を掘る——アジアの植民地支配と戦争の語り方』御茶の水書房。